

5 堂面渡しの架橋

高崎 力

古利根川、元荒川、綾瀬川の流れる越谷の道路は、今でも橋によって他市町と結ばれてゐるが近年まで奥羽街道（日光道）を除き人馬の通行は渡し舟によるところが多かった。このうち古利根川筋の渡舟場としては平方渡（対岸は藤塚）戸崎渡（赤沼）大杉渡（大川戸）堂面渡（松伏）増林渡（上赤岩）増森渡（下赤岩）などがあつた。中でも明治以降県道となつた岩槻―野田線にかかると戸崎渡、旧国道十六号線（大沢―野田線）と県道平方―足立線を結ぶ堂面渡は比較的通行量の多い渡し場であつた。

戸崎渡場

江戸末期から地元の小早川家が渡場を運営し、対岸の赤沼（現春日部市）には小屋を建て仲問二人を常駐させていた。渡し舟は一間×三間の人船と平板造りの馬船の二隻を常備し竹竿で漕いでいた。対岸から声が掛かると迎えに行く不定期便で、渡し賃は明治期で人二、三厘、馬三、四厘、荷三、四厘であつたが大正期から値上げし昭和期になると人一銭、馬三銭、自転車二銭りヤカー三銭となつた。勿論課税対象である。戸崎渡しは昭和九年春の古利根橋の架橋まで運行していた。木造の古利根橋は、その後の県道の拡中舗装直線化により取壊れられ上流七十米に新たに鉄筋コンクリート橋が完成したのは昭和三十一年三月である。今では渡場風景もうすれた。

堂面渡場

向畑渡しともいわれるが旧新方村大字向畑字堂面にあつたので堂面渡しと呼ばれて
いた。堂面とは近くに観音堂があり堂に面した場所からの地名といわれている。渡場といわれる屋
その鈴木家が代々渡場を運営し、鈴木すけさんは六代目の舟頭を務めていた。渡し舟は近くの聖
徳寺の赤檣を舟材とした一間×三間程の舟で対岸に客が来て呼声が掛かると迎えに漕いで行つた。
水量多く流水の急な夏場は上流に向かつて竿で漕がないと下流に流されて対岸に着けないので、後
に兩岸を八番線の針金で結び舟の導線として竹竿で漕いで行つた。湯水期の冬は流れのあるミオま
で道を造つて渡つたので川中が狭く架であつた。市内の各渡船場の渡賃は川中や流れや通行量によ
つて多少の相違があつたが昭和期の堂面渡しでは人二銭、自転車三銭である。なお利用の多い新方
地区の方がうはいちいち渡賃もいたたかす舟石といつて秋の収穫期に一軒あたり玄米三升(半年分
)、麦の収穫期に麦三升(半年分)をまとめていたなど地元民の便宜を図つていた。

堂面渡しがかもつとも賑わつたのは昭和十二年から同十七年までである。この頃、全国的にハイキ
ングブームが起こり、東武鉄道では越谷水郷ハイキングコースを設定し宣伝したので休日には東京
方面から多数のハイカーが訪れた。コースは越ヶ谷駅―元荒川―逆川―古利根川―堂面渡し―大川戸
―赤沼―戸崎―武里駅である。休日には渡場である鈴木家は家を開放して休憩、昼食の場所とし
り、特別便として遊覧船を仕立て大川戸まで通航した程である。戦後も渡船は引続き運行し、昭和

三十年前後には全国的にも渡船場が少なくなリ、堂面渡場風景が市販カレンダーに掲載されると多くの画家やカメラマンが訪づれるようになった。

堂面橋の架橋

新方村を始め十の町村が合併して越谷町が誕生したのは昭和二十九年十一月

三日。この合併に先立ち新方村では、桜井村、大袋村との三か村合併論、松伏村との二か村合併論、更に十か町村による大同合併論などが持ち上がり、この論議の過程で堂面橋の架橋論が浮上した。

この合併論は後に十か町村による大同合併に結着し、昭和二十九年九月には越谷町新町建設計画書が作成され、その中の要望書として「旧新方村より北葛松伏村への交通は古利根川の渡船により行われていたが、野田方面との交通の便を考え県道越ヶ谷野田線と桜井吉川線とを結ぶよう古利根川に架橋せらるるよう要望する」とうたわれた。架橋工事にいたるまでのいきさつについては当時の昭和三十一年十一月六日付の埼玉新聞には、「この橋は一昨年秋、旧新方村が越谷町合併の際新設を公約したが実現出来ず、昨年秋地区民大会が開かれるなど問題を起した」とあり、架橋工事の概要として「越谷町は新方向畑と松伏町松伏間古利根川船渡し場の架橋を計画していたが、自衛隊古河駐屯部隊の機動力を要請、架橋工事を二十二日着工することになった。自衛隊は架橋演習という名目でクレイン、ブルドーザなどと隊員六十名を動員、新方花向院に宿泊して突貫工事を行うが、

業者の倍も速く、来月中旬頃完成の予定、経費もカツリンその他消耗品代だけで済み、二、三割安
いというほど報じている。このようになつた経緯については行政文書を調べなければ詳らかにでき
ないが、思ふに地区民の願望と町村合併の際の公約、新町建設時の財政難と自衛隊の架設練習等が
絡み合つた所産といえよう。架橋工事の概況については聖徳寺住職植葉嶺孝氏の資料によると、当時
の予算総額二百万円、うち工事費百八十万円。工期は三十日間。昭和三十一年十一月二十三日工事
開始。陸上自衛隊吉河南自衛隊員六十名は太子堂、清淨院、観音堂に分宿し、地元婦人会員が早朝
二時より炊事に當るなど地元総ぐるみで協力し、昭和三十一年十二月二十八日には堂面橋開橋祝が
盛大に催され、ここに地元民の熱い願いが達成されたとある。

新堂面橋

木造の堂面橋は、その後交通量の増大、車輦の大型重量化、市道の拡中舗装、およ
び橋自身の老朽化により取壊れられ、昭和四十一年三月、同地点に新たに鉄筋コンクリー
トの堂面橋が完成したのでその姿を消してしまった。

その昔、故郷を後に親に送られて堂面渡しを渡つた丁稚奉公の少年たち。隣村へ渡し舟に揺られ
て嫁いでいった花嫁さん。帰り舟に乗つて故郷の土を踏むことのできなかつた兵隊さん。悲喜こも
ごもの人生を乗せた渡し舟も、そして架橋物語を秘めた旧堂面橋も今では人々の記憶から忘れ去ら
うとされている。